

博士學位論文

論文の要旨および審査結果の要旨



2015年9月

人間総合科学大学

— 目次 —

小中学生の生活実態と心身の健康—心身健康科学の知見から—

Life Style and Health of School Children in Japan from the perspective of Health Science of Mind and Body

・・・ 門田 美恵子 ・・・ 1

女性高齢者における皮膚角質層水分量と主観的健康感に及ぼす酸化ストレスの影響

—尿中バイオピリンを用いた検討—

Influence of Oxidative Stress on Stratum Corneum Water Content and Subjective Health in Elderly Women

—Urinary Biopyrrin as a Marker for Oxidative Stress—

・・・ 尾形 隆夫 ・・・ 3

カックアップ装具のデザインに求められる要素の検討—支持部の長さを使いやすさの関連について—

Investigation on Factors Expected for Cock-Up Splints' Design – Relationship between Length of Support Part and Usability –

・・・ 吉田 渡 ・・・ 4

透析患者の適切なたんぱく摂取量の検討—心身健康科学の視点から—

Study on Optimal Protein Intake for Dialysis Patients: From the Viewpoint of Physical and Mental Health Sciences

・・・ 下出 眞知子 ・・・ 6

産業保健活動における心身健康支援をめざした健診データ・自覚的健康・健康認識の関連の検討

Study on Relationships among Medical Checkup Data, Perceived Health, and Health Recognition for Provision of Mental and Physical Health Support in Occupational Health Activities

・・・ 福田 真喜子 ・・・ 7

氏名	門田 美恵子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 25 号
学位授与年月日	平成 27 年 9 月 25 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	小中学生の生活実態と心身の健康—心身健康科学の知見から—		
研究指導教員	教授 青木 清		
論文審査委員	主査 丸井 英二	副査 吉田 浩子	副査 鈴木 はる江 副査 大東 俊一

博士学位論文内容の要旨

門田美恵子の博士学位論文は、教職員が学校生活の中で子どもの健全育成阻害要因を早期に発見し、解決の困難化を予防するための手がかりを、心身健康科学の知見から得ることを目的とする。わが国において、小中学校は子どもの生命・身体・生活を守る健全育成の拠点として重要な役割を担っている。学校保健安全法の改正（2008年）に伴い、文部科学省は「手引き」を作成し、問題が顕在化した児童生徒の具体的指導法を示している。しかし、子どもの健全育成の阻害因子を早期に発見し、問題の重篤化を予防する手法はまだ確立されていない。

そのために、二つの調査を行った。まず、調査1として、公立学校に通う小学6年生418人を対象に、「生活実態」と「登校意欲」について無記名自記式質問紙による集合調査を実施した（2010年9月・2011年7月に、A県とB県の4校で実施）。さらに、調査2としてインターネット調査会社を介しA県在住の小学4年生から中学3年生の児童生徒とその保護者計614人を対象に、「生活実態」「学習に対する負担感（以下「負担感」）」「疲労感」「心身不調に対する自覚症状（以下「自覚症状」）」に関するインターネット調査を実施した。本研究は人間総合科学大学倫理審査委員会（受付番号：第183号）の承認を得て実施した。

調査1では、有効回答者383人（有効回答率91.6%）のデータを解析した結果、「生活実態」（平日22時台に就寝、8時間以上の睡眠、毎日朝食摂取、偏食がない、家族から褒められる、学校は楽しい、友人関係良好）と「登校意欲」の間に有意な関連が認められた。

また、調査2では、小学生278人（有効回答率90.8%）、中学生267人（有効回答率86.7%）のデータを解析した。8割以上の児童生徒が「毎日朝食摂取」「学校が楽しい」「授業が分かる」「友人関係良好」と回答し、学年が進むに従って就寝時刻が遅く睡眠時間が短くなることが示された。また、中学生は小学生に比べ授業の理解度が低かった。「負担感」「疲労感」「自覚症状」の得点の平均値は、中学生が小学生に比べ有意に高く、小学生は「学校は楽しくない」「授業が分からない」「友人関係不良」を選択した者が非選択者に比べ有意に多かった。

こうした結果から、児童生徒の「生活実態」と「登校意欲」「負担感」「疲労感」「自覚症状」に関連があり、心身相関の観点から、ひとつの事項の改善が他の事項の改善に連鎖する可能性が示唆された。したがって、教員が日々の学校生活の中でより観察しやすい事項、例えば児童生徒の日頃の生活習慣を知るだけでも、疲労感や心身不調の早期発見につながり、「こころ」と「からだ」および社会的状況が良好な状態（well-being）の維持に向けた支援の端緒となると考察した。

本研究により、児童生徒の「生活実態」「登校意欲」「負担感」「疲労感」「自覚症状」の有機的関連性を実証的に示すことで、子どもの健全育成の阻害要因の早期発見と予防に心身健康科学の視点を取り入れることの有効性が示唆された。学校現場で手軽に使用できる観察ポイントのチェックシートを作成し、その有効性を検証することが今後の課題である。

博士学位論文審査結果の要旨

門田美恵子の論文は、教職員が学校生活の中で、子どもの健全育成阻害要因を早期に発見し解決の困難化を予防するための手がかりを、心身健康科学の知見から得ることを目的とした論文である。わが国において、小中学校は子どもの生命・身体・生活を守る健全育成の拠点として重要な役割を担っている。学校保健安全法の改正（2008年）に伴い、文部科学省は「手引き」を作成し、問題が顕在化した児童生徒の具体的指導法を示した。しかし、子どもの健全育成の阻害因子を早期に発見し、問題の重篤化を予防する手法はまだ確立されていない。

目的の検証のために、二つの調査を実施した。調査1として、公立学校に通う小学6年生418人を対象に、「生活実態」と「登校意欲」に関する無記名自記式質問紙を用いた集合調査を実施した（A県とB県の4校で実施）。有効

回答者 383 人（有効回答率 91.6%）のデータを解析した結果、「生活実態」（平日 22 時台に就寝、8 時間以上の睡眠、毎日朝食摂取、偏食がない、家族から褒められる、学校は楽しい、友人関係良好）と「登校意欲」の程度には有意な関連が認められた。

さらに、調査 2 としてインターネット調査会社を介し A 県在住の小学 4 年生から中学 3 年生の児童生徒とその保護者計 614 人を対象に、「生活実態」「学習に対する負担感（以下「負担感」）」「疲労感」「心身不調に対する自覚症状（以下「自覚症状」）」に関するインターネット調査を実施した。小学生 278 人（有効回答率 90.8%）、中学生 267 人（有効回答率 86.7%）のデータを解析した結果、8 割以上の児童生徒が「毎日朝食摂取」「学校が楽しい」「授業が分かる」「友人関係良好」と回答し、学年が進むに従って就寝時刻が遅く睡眠時間が短くなり、中学生は小学生に比べ授業の理解度が低かった。「負担感」「疲労感」「自覚症状」の得点の平均値は、中学生が小学生に比べ有意に高く、小学生は「学校は楽しくない」「授業が分からない」「友人関係不良」を選択した者が非選択者に比べ有意に多かった。

以上の結果から、児童生徒の「生活実態」と「登校意欲」「負担感」「疲労感」「自覚症状」に関連があり、心身相関の観点から、ひとつの事項の改善が他の事項の改善に連鎖する可能性が示された。したがって、教員が日々の学校生活の中でより観察しやすい事項、例えば児童生徒の日頃の生活習慣を知るだけでも、疲労感や心身不調の早期発見につながり、「こころ」と「からだ」および社会的状況が良好な状態（well-being）の維持に向けた支援の端緒となることが示唆された。

本研究により、児童生徒の「生活実態」「登校意欲」「負担感」「疲労感」「自覚症状」の有機的関連を実証的に示すことで、子どもの健全育成の阻害要因の早期発見と予防に、心身健康科学の視点を取り入れることの有効性が示唆された。学校現場で手軽に使用できる観察ポイントのチェックシートを作成し、その有効性を検証することが今後の課題である。

口頭試問では、以上のような研究の内容について約 45 分間にわたり発表し、その後、各審査委員から研究の内容に関して各種の質問とコメントがあった。それに対する応答が行われたが、申請者は専攻分野について自立して研究を行うことができると判断されるとともに、本研究は心身健康科学の分野に貢献するものであることが認められ、全会一致で合格と判定した。

門田の研究は、教職員が学校生活の中で、子どもの健全育成阻害要因を早期に発見し、解決の困難化を予防するための手がかりから心身健康科学の知見を示唆し、今後の学校教育現場における参考となるものである。したがって、門田美恵子の論文は心身健康科学の学位（博士）に値するものである。また、門田は、その後の公開発表会（約 20 名参加）において研究成果を発表し、評価を得て合格と判定された。

氏名	尾形 隆夫		
学位の種類	博士（心身健康科学）	証書番号	甲第 26 号
学位授与年月日	平成 27 年 9 月 25 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	女性高齢者における皮膚角質層水分量と主観的健康感に及ぼす酸化ストレスの影響 —尿中バイオピリンを用いた検討—		
研究指導教員	教授 近藤 昊		
論文審査委員	主査 青木 清	副査 林 纈治	副査 鈴木 はる江 副査 庄子 和夫

博士學位論文内容の要旨

【目的】酸化ストレスについては多くの研究がなされているが、尿中バイオピリン（尿中 BPN）を用いた酸化ストレス状態と皮膚角質層水分量および酸化ストレス状態と主観的健康感の関係についての報告はない。本研究では、性差の問題を回避するために対象者を女性とし、尿中 BPN を用い酸化ストレス状態と皮膚角質層水分量および酸化ストレス状態と主観的健康感との関係を明らかにし、さらに高齢者と若年者のデータを比較することで女性高齢者の特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】本研究は女性を対象とし、高齢者を対象にした研究 1 と若年者を対象にした研究 2 からなる。酸化ストレス状態は尿中 BPN を定量することで評価し、皮膚角質層水分量は水分測定器のモイスターチェッカーで測定した。また主観的健康感 Visual Analogue Scale (VAS) を用いて評価した。

【結果】研究 1 では女性高齢者 55 名（うち 11 名が都心近郊在住者で 82.60±5.40 歳（平均±SD）、44 名が九州地方農村地帯在住者で 69.52±3.51 歳）を研究対象者とした。尿中 BPN 量は都心近郊在住者が九州地方農村地帯在住者よりも有意に高く（ $p=0.01$ ）、尿中 BPN 量と皮膚角質層水分量の関係、尿中 BPN 量と主観的健康感の関係では両地域の高齢者とも有意な負の相関関係が認められた。研究 2 では都心近郊在住女性若年者 34 名（20.53±1.44 歳）を研究対象者とした。尿中 BPN 量と皮膚角質層水分量の間には有意な負の相関関係が認められた。一方、尿中 BPN 量と主観的健康感の間には有意な相関関係が認められなかった。

【考察】酸化ストレス状態について都心近郊在住と九州地方農村地帯在住の女性高齢者の間に有意差が認められたが、都心近郊在住の女性高齢者と女性若年者の間では有意差が認められなかったことから、酸化ストレス状態には年齢よりも住んでいる地域すなわち気候などの自然・生活環境、文化などが大きく影響すると考えられた。

【結論】女性の高齢者と若年者において酸化ストレス状態と皮膚角質層水分量の間には負の相関関係が存在した。女性若年者では酸化ストレス状態と主観的健康感の間に相関関係は認められなかったが、女性高齢者では負の相関関係が存在した。このことから酸化ストレス状態と主観的健康感の間に有意な相関関係が存在することが女性高齢者の特徴であることが明らかになった。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学（第 245 号） 新渡戸文化短期大学（H24-1）

博士學位論文審査結果の要旨

本研究は女性高齢者と女性若年者の酸化ストレス状態と皮膚水分量および主観的健康感の関係を明らかにした研究である。平成 27 年 7 月 22 日に論文審査委員全員が参加する中で本論文に関する口頭試問が実施され、申請者に論文内容の発表ならびに関連事項の質問に対する応答を求めた。その後の審査で全論文審査委員は本研究が心身健康科学の分野に貢献し独創性のある内容であることを認め、申請者が博士（心身健康科学）の学位を受けるに十分な資格を有するとして全会一致により審査の結果を合格と判定した。あわせて、口頭試問では本論文に関する専門知識を問う質問についての的確な応答が得られたことから、申請者は今後自立して研究を行うことができると判断した。

氏名	吉田 渡		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 27 号
学位授与年月日	平成 27 年 9 月 25 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	カックアップ装具のデザインに求められる要素の検討 — 支持部の長さを使いやすさの関連について —		
研究指導教員	教授 久住 武		
論文審査委員	主査 青木 清	副査 丸井 英二	副査 栗山 明彦 副査 鍵谷 方子

博士学位論文内容の要旨

吉田渡の学位論文は、1)序論、2)方法、3)研究 1～研究 5、4)総合考察、5)結論の 5 つの部分から成る。これまで、義肢装具学の領域では力学的側面を重視する傾向が強く、使用者の機能を補完するために装具の支持面積は大きい程良いとされてきた。他方で、使用者の機能や生活の質 (Quality of Life : QOL) を考慮すると、装着時の快適性と使いやすさの要素を取り入れる必要がある。そこで本研究では、カックアップ装具 (装具) が前腕の回旋可動域と関係することから、装具の装着によって生じる前腕の回旋制限が日常生活動作 (Activities of Daily Living : ADL) に与える影響が少ない装具のデザインを求めることを目的とした。

方法では、上肢に運動機能障害のない健康成人を対象として研究 1～研究 5 を実施したことを説明した。各研究で使用した装具は、対象者にあわせ、支持部の位置が前腕の掌側と背側それぞれのものに、長さが前腕長の 2/3 (Long タイプ) と 1/6 (Short タイプ) のものを組み合わせた 4 種類を使用した。研究 1 では、装具の装着が回旋可動域に与える影響を調べるために前腕の回旋動作を行い、可動域、呼吸数および心電図 R-R 感覚を記録した。研究 2 では装具の装着が及ぼす圧力の影響を調べるため、錘を保持した時の身体に加わる圧力を計測した。研究 3 では、装具の装着による固定性を調べるため、任意の作業遂行時の手関節の可動範囲を計測した。研究 4 では装具の装着が呼吸と心拍に与える影響を調べるため、対象者が鍵の開閉動作を繰り返したときの装具の使用感を質問紙で調査するとともに、呼吸数と心電図 R-R 間隔の変化を動作前後の安静時と動作時に計測した。研究 5 では装具の装着が上肢機能に与える影響を調べるため、対象者に対して上肢機能検査を行った。本研究は人間総合科学大学倫理審査委員会の承認 (第 256 号) を得て行った。

結果として、研究 1 における対象者の前腕の回旋可動域について、Long タイプに比べて Short タイプでは回旋の制限は減少したが、掌側型と背側型による違いはみられなかった。また、呼吸数は全ての条件で動作時には上昇したが、心電図 R-R 間隔は安静時の範囲内での変化であった。圧力に関する研究 2 では、Short タイプと背側型で圧力が上昇したこと、痛みに関する主観的評価は掌側型に比べて背側型で痛みが自覚されていたことが明らかになった。手関節の固定に関する研究 3 では、Long タイプよりも Short タイプで固定性の低下がみられたが、治療効果に影響を及ぼす程の低下は認められなかった。研究 4 における装具の使用感については、装具なしの状態と Short タイプおよび Long タイプ装着時の間に大きな差は認められなかったが、Long タイプの方に悪い傾向がみられた。呼吸数は動作によって有意に上昇したが、Short タイプと Long タイプとの間に差はみられなかった。また、心電図 R-R 間隔についても、呼吸数と同様に条件による違いは認められなかった。研究 5 の簡易上肢機能検査の得点は、Long タイプが Short タイプに比べて低値を示した。対象者の見た目の印象評価は、支持部の位置および長さいずれの条件間においても違いがなかった。他方で対象者が使用した後は、長さが判断基準となり Long タイプより Short タイプの方が好印象を示した。

考察では、カックアップ装具を健康成人の前腕に装着した時の対象者の機能と形態から、装具の構造や力学的な面と使用感や生理的な指標をふまえ、Long タイプと Short タイプのどちら対象者にとって優れているかについて心身健康科学の視点から検討した。その結果、生理的な指標では対象者が健康成人であるためか Long タイプと Short タイプには大きな差がみられなかったこと、使用感では感覚的に Short タイプの方が Long タイプより好印象を与えることを示すことができた。本研究によって、今日まで Long タイプのみであった装具に対して、障害者や患者が装着する時に異なる 2 種の Long タイプか Short タイプのどちらを選択するのがよいかについて科学的な根拠を示すことができたと言える。

結論として、前腕の回旋可動域の制限は Long タイプより Short タイプで減少したが、Short タイプで圧力の上昇と固定性の低下がみられたこと、Short タイプは腕に大きな負荷が加わらない状態において使用感の主観的評価は良かったことを述べた。本研究により、装具の装着を必要とする利用者に対して、装着時のインフォームド・コンセン

トにおいて利用者の選択の幅を広げ、これまでの Long タイプだけでなく、Short タイプを選択できるような根拠をもたらすことができた。

博士学位論文審査結果の要旨

吉田渡の博士学位論文は、上肢に疾患や障害がありカックアップ装具（以下、装具）を装着している使用者が快適で使いやすい装具を利用できるようにするために、どのような装具のデザインが良いかについて行った研究をまとめたものである。義肢装具学を専門とする吉田渡は、装具によって生じる前腕の回旋制限に着目して、装具デザインにあたって使いやすい装具は何かを導き出すために、上肢に運動機能障害がない健常者を対象として Activities of Daily Living (ADL) に与える影響が少ない装具のデザインを明らかにすることを目的とした。

方法として、本研究に同意した上肢に運動機能障害がない健常な成人 10 人を対象として、研究 1～研究 5 を行った。研究 1 では、装具を装着して前腕の回旋可動域の計測を行った。同時に呼吸および心拍の計測を行い、動作中の装具の使用感を評価した。研究 2 では、装具を装着して任意の重さの錘を保持した時の装具から身体に加わる圧力を計測した。研究 3 では、装具を装着して任意の動作を行った時の使用感を 5 段階で評価した。同時に、呼吸と心拍を計測した。研究 5 では、装具を装着した状態で簡易上肢機能検査 (STEF) を行い、作業能力を定量的に評価した。また、STEF を実施している時の装具の使用感の評価を行った。さらに、装具の使用前と使用後の装具に対する印象の変化を調査した。本研究は人間総合科学大学倫理審査委員会の承認（第 256 号）を得て行った。

結果として、研究 1 における対象者の前腕の回旋可動域について、Long タイプよりも Short タイプで回旋の制限が減少したが、掌側型と背側型による違いはみられなかった。また、呼吸数は全ての条件で動作時には上昇したが、心電図 R-R 間隔は安静時の範囲内での変化であった。研究 2 は圧力に関する研究である。Short タイプと背側型で圧力が上昇したこと、痛みに関する主観的評価は掌側型に比べて背側型で痛みが自覚されていたことが明らかになった。手関節の固定に関する研究 3 では、Long タイプよりも Short タイプで固定性の低下がみられたが、治療効果に影響を及ぼす程の低下は認められなかった。研究 4 における装具の使用感については、装具なしの状態と Short タイプおよび Long タイプ装着時の間に大きな差は認められなかったが、あえて差をみると Long タイプの方が Short タイプに対して悪さを示した。呼吸数は動作によって有意に上昇したが、Short タイプと Long タイプとの間に差はみられなかった。また、心電図 R-R 間隔についても、呼吸数と同様に条件による違いは認められなかった。研究 5 の簡易上肢機能検査の得点は、Long タイプが Short タイプに比べて低値を示した。対象者の見た目の印象評価は、支持部の位置および長さいずれの条件間においても違いがなかった。他方で対象者が使用した後は、長さが判断基準となり Long タイプより Short タイプの方に好印象を示した。

考察では、カックアップ装具を健常成人の前腕に装着した時の対象者の機能と形態から、装具の構造や力学的な面と使用感や生理的な指標をふまえ、Long タイプと Short タイプのどちら対象者にとって優れているかについて心身健康科学の視点から検討した。その結果、生理的な指標では対象者が健常成人であるためか Long タイプと Short タイプには大きな差がみられなかったこと、使用感では感覚的に Short タイプの方が Long タイプより好印象を与えることを示すことができた。本研究によって、今日まで Long タイプのみであった装具に対して、障害者や患者が装着する時に異なる 2 種の Long タイプか Short タイプのどちらを選択するのがよいかについて科学的な根拠を示すことができたと言える。

結論として、前腕の回旋可動域の制限は Long タイプより Short タイプで減少したが、Short タイプで圧力の上昇と固定性の低下がみられたこと、Short タイプは腕に大きな負荷が加わらない状態において使用感の主観的評価は良かったことを述べた。本研究により、装具の装着を必要とする利用者に対して、装着時のインフォームド・コンセントにおいて利用者の選択の幅を広げ、これまでの Long タイプだけでなく、Short タイプを選択できるような根拠をもたらすことができた。

口頭試問では、以上のような研究の内容について約 45 分間にわたり発表した。その後、各審査委員から研究の内容に関して各種の質問とコメントがあった。その結果、論文の内容についていくつかの修正すべき点が指摘され、各審査委員の指摘に基づいて論文を修正し再提出することが求められた。審査委員が修正して再提出された論文を再読して審議した結果、全会一致で合格と判定された。申請者は専攻分野について自立して研究を行うことができるとともに、本研究の内容に独創性があること、また心身健康科学の学位（博士）に値するものとして認められた。吉田は本学において開催された公開発表会（約 30 名参加）で研究成果を発表して合格の評価を得た。このことにより、今後、研究者として自立するに十分な研究成果を上げたと判断された。

氏名	下出 眞知子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 28 号
学位授与年月日	平成 27 年 9 月 25 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	透析患者の適切なたんぱく摂取量の検討 ―心身健康科学の視点から―		
研究指導教員	教授 鈴木 はる江		
論文審査委員	主査 庄子 和夫	副査 島田 涼子	副査 小岩 信義 副査 鈴木 盛夫

博士学位論文内容の要旨

【目的】維持透析患者の蛋白質摂取基準量は 1.0~1.2 g/kg(体重)/日 (2007 年度基準) であり、健常人の蛋白質推奨量の 0.9 g/kg/日 より高めに設定されている。これは透析中に蛋白質やアミノ酸が漏出したり栄養障害が生じたりすることを考慮しているためである。しかしながら、蛋白質摂取量が増えると血清リン値が上昇することから、心血管病変をきたす可能性が高まる。このような問題があるにもかかわらず先行研究において高リン血症を是正するための適切な蛋白質摂取量を心身両面から検討した研究は少ない。そこで本研究では蛋白質摂取量 1.0 g/kg/日未滿の透析患者の血清リン値、血清カリウム値と栄養状態を検討し、さらに心身健康科学の視点から適切な蛋白質摂取量を検討することを目的とした。

【方法】外来通院透析患者 77 例の標準化蛋白異化率 (nPCR) の 1 年間の平均値を蛋白質摂取量とし、0.6~0.8 g/kg/日未滿 (L 群)、0.8 g/kg/日以上~1.0 g/kg/日未滿 (M 群)、1.0 g/kg/日以上 (H 群) の 3 群間で血液データ、栄養状態を比較した。さらに 3 群間で nPCR と不安尺度 (State-Trait Anxiety Inventory; STAI)、健康生成志向尺度 (Sense of Coherence; SOC)、腎疾患特異的 QOL (the Kidney Disease Quality of Life Instrument Short Form; KDQOL-SF) の得点を比較し透析患者の蛋白質摂取量を検討した。

【結果】血清アルブミン、体格指数 (BMI)、エネルギー摂取量および精神的負担度の不安尺度と健康生成志向尺度の値について 3 群間で差は有意でなかった。血清リン値、血清カリウム値、尿素窒素値は nPCR が低い群ほど低く、その差は有意であった。KDQOL-SF においては「社会的生活機能」、「心の健康」、「腎疾患の日常生活への影響」、「腎疾患による負担」の項目が nPCR の低い L 群で他の群より有意に良好であった。

【考察】透析患者の蛋白質摂取量に基づく 3 群間の血清アルブミン値、エネルギー摂取量および精神的負担度の不安尺度と健康生成志向尺度の得点の比較から、蛋白質摂取量が 1.0 g/kg/日未滿でも栄養状態は損なわれず、かつ精神的負担が少なく、血清リン値を抑えられる摂取量であると考えられた。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学 (第 294 号) 良秀会藤井診療所 (第 2 号)

博士学位論文審査結果の要旨

本研究は摂取蛋白質量と生化学的データや心理データの関わりをみた研究であり、推奨されている蛋白質摂取量の対象者と比較し推奨量より少ない対象者でも栄養状態は良好に保てること、不安と QOL に差はみられないことが明らかとなった。平成 27 年 8 月 28 日に論文審査委員全員が参加する中で本論文に関する口頭試問が実施され、申請者に論文内容の発表ならびに関連事項の質問に対する応答を求めた。その後の審査で全論文審査委員は本研究が心身健康科学の視点、新奇性、研究の発展性、そして学問的意義をもつことから博士 (心身健康科学) の学位に値することを認め、全会一致により審査の結果を合格と判定した。

主論文掲載誌：日本透析医学会雑誌, 48(2), 101-107, 2015.

氏名	福田 真喜子		
学位の種類	博士（心身健康科学）	証書番号	甲第 29 号
学位授与年月日	平成 27 年 9 月 25 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	産業保健活動における心身健康支援をめざした健診データ・自覚的健康・健康認識の関連の検討		
研究指導教員	教授 丸井 英二		
論文審査委員	主査 久住 武	副査 橋詰 直孝	副査 中野 博子 副査 鍵谷 方子

博士學位論文内容の要旨

福田真喜子の学位論文は、緒言、方法、結果、考察、結論の 5 つの部分から成る。タイトル「産業保健活動における心身健康支援をめざした健診データ・自覚的健康・健康認識の関連の検討」に示されているように、産業保健にとって重要な意味をもつ研究となっている。以下にその要約を示す。

【目的】産業保健活動において、疾病に注目するだけではなく、心身の良い状態（Well-being）に着目した健康支援の検討のため、健診データ・自覚的健康、健康認識の関連を明確にすることを目的とした。

【方法】A 銀行の首都圏支店に勤務する 108 名を対象とした。健診データを得て、THI 健康調査票を用いた自覚的健康の調査、心身の健康状態についての自己および身近な他者視点による健康・不健康の認識調査を実施し、相互の関連について調べた。

【結果・考察】健診データと THI 健康調査の関連を解析した結果、「肥満」群は「正常」群より「攻撃性」が強いこと、「血圧上昇」群は「血圧正常」群より「消化器」・「神経質」の訴えが少なく「攻撃性」が強いことなどが明らかとなり、THI 健康調査の併用により健診データだけでは判らない心身の関連性が示された。また、健康認識が自他ともに「不健康」群は、「健康」群より BMI・腹囲・血圧・中性脂肪などが高く、健診項目の「異常」が「不健康」と認識していた。他者評価の「不健康」群および「健康」群は「とても健康」群より THI 健康調査の「精神的な健康」・「抑うつ性」の訴えが強く、他者評価が「とても健康」群以外への精神的健康支援の必要性が示唆された。

【結論】産業保健活動において、労働者の心身の健康支援を展開するためには、健診データだけでなく、自覚的健康や健康認識および身近な他者評価を手がかりとした多面的な介入が必要となることが示唆された。

上記のようにタイトルに沿う内容としてまとめられた。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学（第 364 号）

博士學位論文審査結果の要旨

平成 27 年 7 月 17 日、論文審査委員が一堂に会した場で本論文に関する口頭試問を実施し、申請者に論文内容の発表ならびに関連事項の質問に対する応答を求めた。その結果、論文審査委員は本研究が心身健康科学の分野や産業保健領域に貢献し独創性のある内容であることを認め、申請者が博士（心身健康科学）の学位を受けるに十分な資格を有するとして全会一致により審査の結果を合格と判定した。あわせて、口頭試問では本論文に関する専門知識を問う質問についての的確な応答が得られたことから、申請者は今後自立して研究を行うことができると判断した。

